戀片

katakoi

詩／北原 白秋
曲／多田 武彦

あかしやの金と赤とがちるぞえな。
かはたれの秋の光にちるぞえな。
片戀の薄着のねるのわがうれひ
「曳舟」の水のほとりをゆくころを。
やはらかな君が吐息のちるぞえな。
あかしやの金と赤とがちるぞえな。

秋、感情の高まりと儚さを象徴するあかしやの葉が散る。
夕方の光に散る金と赤のあかしやの葉。…（「彼は誰」が「誰そ彼」に代わり使われている）
片恋の憂い。それは（心の不安や寂しさの象徴）薄いネル布のような甘美な憂い。
曳舟川のほとりを歩いている私。散るあかしやの葉は、柔らかな君の吐息のようだ。
あかしやの金と赤の葉が、夕方の光を映し散る。片恋の切なく甘い憂いが…。

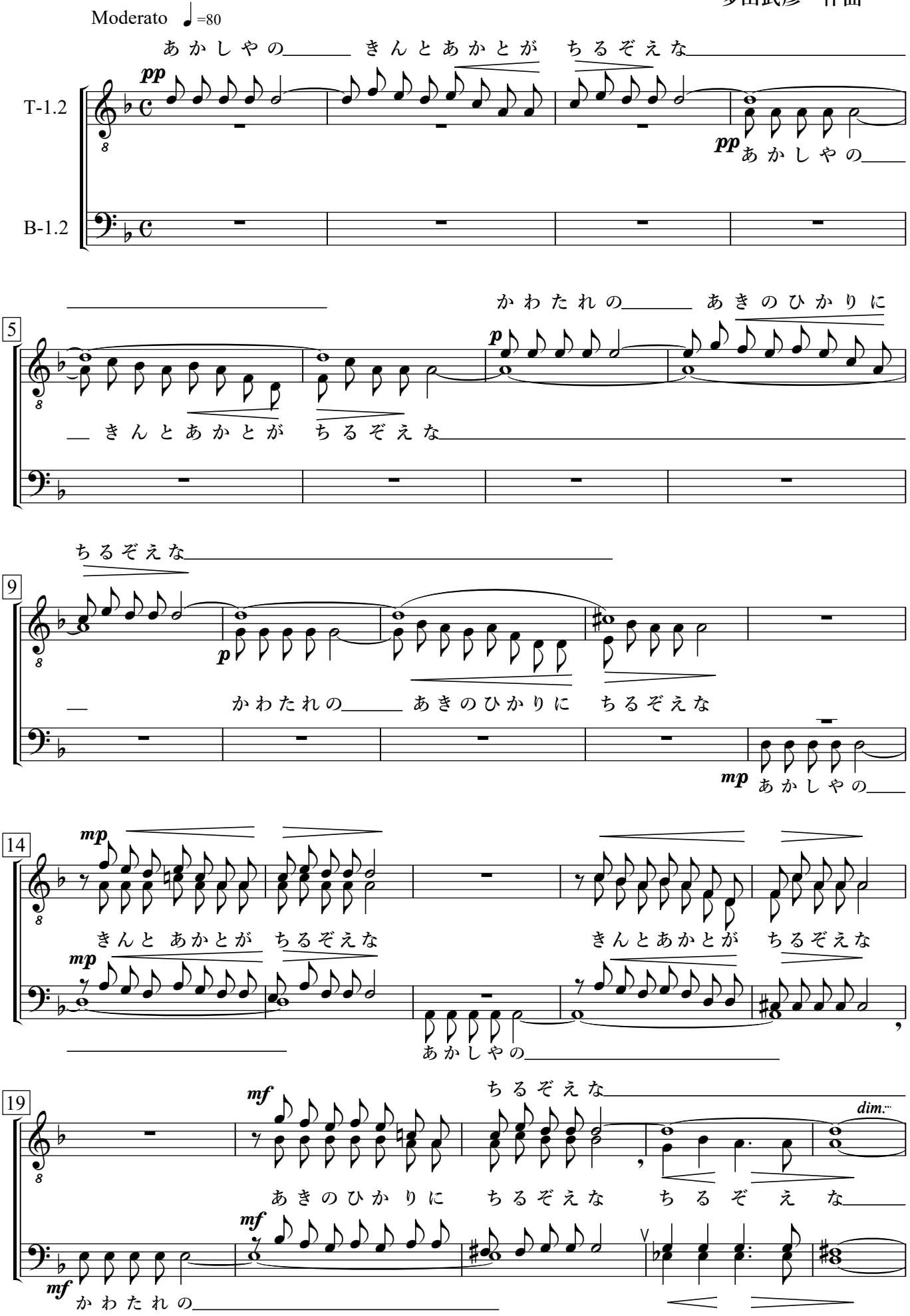
初句を繰り返すことで、自然の儚い美しさと、恋心の繊細な情感が循環するように重なり、片恋の心情が、時間の中で繰り返されるように、永遠に消えず、しかし散りゆく感覚が象徴されている。

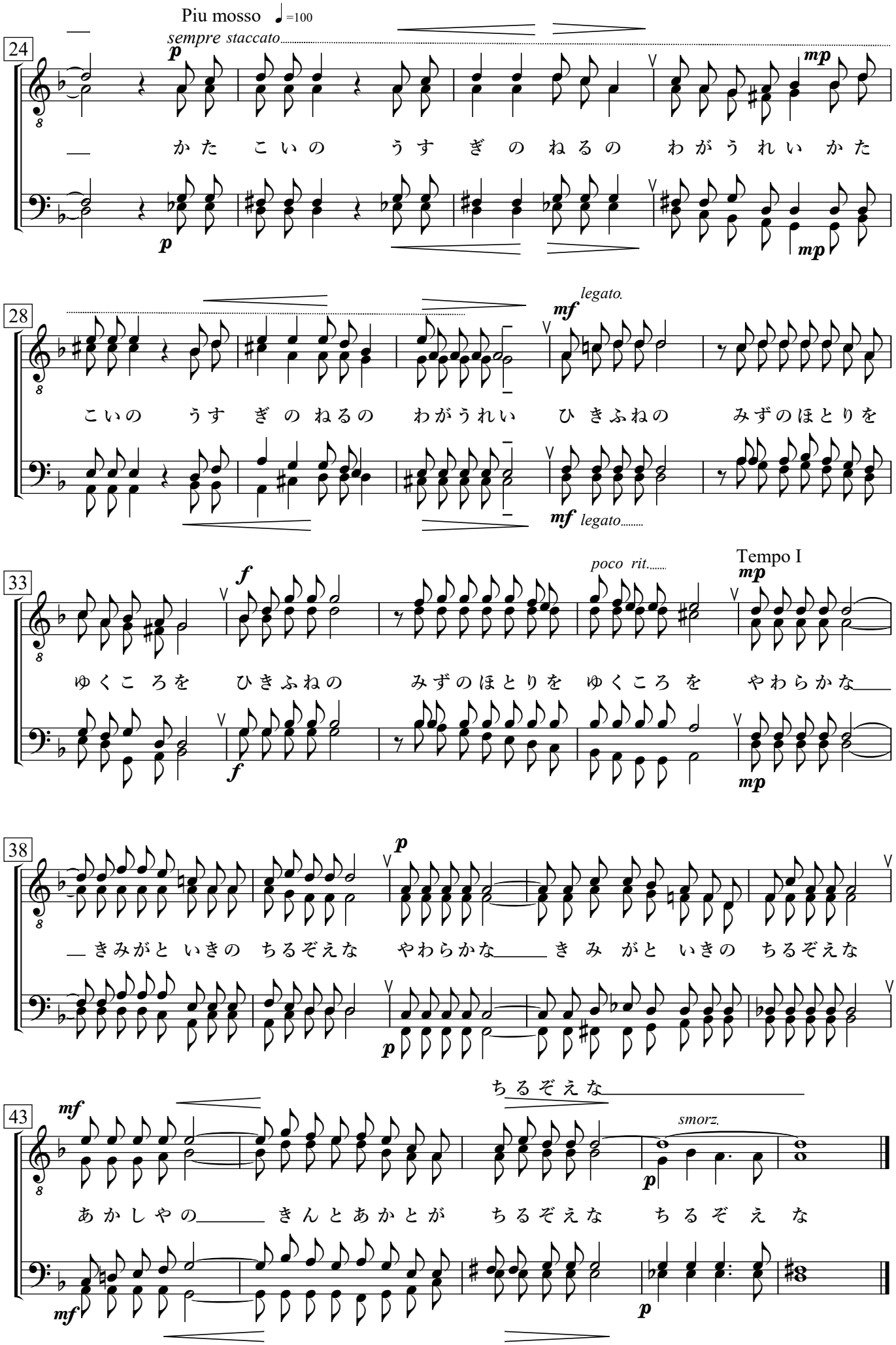
この詩の中心的テーマは、「片恋の切なさ・甘美さ、そして時の儚さと感情の散りゆき」で花や光、吐息といった自然描写を通して、恋の感情が自然現象と一体化している。すなわち、恋する者の心の揺れ、喜びと悲しみが、色彩や光の中で可視化されている。

男声合唱組曲「雪と花火」

I 片恋

北原白秋　作詩
多田武彦　作曲




Piu mosso ♩=100
sempre staccato
24
かた こいの うす ぎ の ねるの わがうれい かた
28
こいの うす ぎ の ねるの わがうれい ひ きふねの みずのほとりを
legato.
legato
33
ゆくこ ろを ひきふねの みずのほとりを ゆくころ を やわらかな
poco rit.
Tempo I
38
きみがと いきの ちるぞえな やわらかな き み がと いきの ちるぞえな
ちるぞえな
43
あかしやの きんとあかとが ちるぞえな ちるぞ え な
smorz.